

台中日本人学校における外国語活動の指導とその実践

— 現地採用職員との英会話授業の試み —

前台中日本人学校 教諭

島根県益田市立小野中学校 教諭 上 田 陽一郎

キーワード：小学校、総合的な学習の時間、外国語活動、英会話、現地採用職員

1. はじめに

台中市は中華民国（以下：台湾）のほぼ中央に位置し、台北、高雄に次いで人口100万人を有する台湾第3の都市である。郊外には中部科学工業地帯があり、主にICチップなどの精密機器の製造が行われている。全世界で使用されているコンピュータ内蔵部品の多くが、この地で作られていると言っても過言ではない。台中日本人学校は市内から10kmほど離れたこの工業地帯の一角にある。1999年9月21日に発生した台湾中部大地震では、当時太平市にあった校地に大きな断層が走り、校舎・校庭とも使用不可能となる致命的な打撃を受けた。復興に向けては地震直後から学校運営委員会の尽力や台湾政府の配慮もあり、現在の大雅郷へ震災後わずか2年という早さで新校舎の竣工となった。2007年（平成19年）10月には学校創立30周年を迎え、盛大に記念式典を挙行了したところである。

前述のとおり、学校が市内から離れたところに位置するため、全校児童生徒の大半はスクールバスで登校し、朝8時の始業から学校生活を送っている。帰宅後、外で友だちと遊ぶ場所や時間に制限があるため、昼休みには校庭や体育館で元気に活動する姿が見られる。また小中併設校であるため中学生が小学生の世話をしたり、小学生にとって中学生は憧れの存在になったりと、日本の学校では経験することのない、恵まれた環境で学校生活を送ることができる。

英語圏以外で生活している子女、保護者にとって外国語、特に英語力の向上には強い関心があると感じた。それは海外で生活する者にとって、英語はコミュニケーション手段として有効であることが身をもって経験できるからだと考える。加えて特に中学生となると進路を考えていく上で、英語検定に代表されるような外国語力の公的な証明を必要とする者も出てくる。年に3回実施した検定では、150名弱の全校児童生徒に対して、のべ50人以上の児童生徒が受検をし、英語力と英語に寄せる関心の高さを感じた。

台中日本人学校では、私が赴任した2年目から外国語指導助手（Assistant Language Teacher 以下：ALTと略す）を現地で採用し、小学部の「総合的な学習の時間」の英語活動の指導を行った。これから述べる実践事例はALTの採用から指導の実際までを中心にまとめたものである。

2. 指導の実際

(1) 指導計画からALTの採用まで

①英語活動の回数と目標、指導体制

台中校では小学部5年生と6年生では、総合的な学習の時間として年間35時間（週1時間）を「英語活動」に充てている。英語活動の時間の目標は、「おもに英語の音声に慣れ親しむことと、英語を通してその背景にある文化や考え方に触れる」こととした。そのため、指導は派遣教員（英語科担当）と母国語話者（native speaker 以下：ネイティブ・スピーカー）の2名が担当することとした。Assistant（助手）という名前が付いているが、実際は採用された現地職員の方に指導をしてもらい、派遣教員はALTと相談しながら進度を決め、学習課題を設定していく姿勢で指導を行うこととした。

②ネイティブ・スピーカーのALTとしての採用

新年度が始まり指導計画や方針が確定したところでALTを採用することとした。まず事務主任（現地採用職員）を通じて台中日本人学校周辺に以下のような条件に合致する方がいるかどうか地元の英会話学校の経営者、講師に尋ねてもらった。

ア 週2時間、小学5、6年生に対して1時間ずつ英会話の指導を行うこと。

イ 指導者はネイティブ・スピーカーあるいはそれに準ずる者であること。

ウ 授業5分前には到着をし、担当教員との打合せをすること

（これに加えて給与面での条件もあったが、ここでは割愛する。）など

問い合わせに対して複数の英会話学校からの申し出があったが、その中から条件を満たした2校に本校へ来校してもらったこととした。そのうちの1校から「実際に指導を見てもらいたい」との申し出があったので、2校ともに模擬授業を実施することとした。模擬授業は予め担当する学年のみを伝え、児童の英語レベルについては一切知らせていない状態で行った。その様子を校長、英語科担当、事務職員で、指導の様子、児童の学習の様子を参観した。どちらも英語指導については経験豊かで、児童も積極的に学習していた。

模擬授業を参観した3名で英語指導力、児童の扱い、熱意等を話し合い、2校のうち1校と1年間、英語活動の指導に当たってもらう契約を締結した。

(2) 小学部5年生の指導

学校で英語を扱った授業は小学5年生で初めて経験することになる。しかし、昨今の英語を取り巻く環境、更に台湾における教育熱の高さも手伝ってか、約半数の児童が英語学習を既に始めている実態があった。しかし、残り半数の児童については、英語という言葉学習するのは初めてであることを忘れて指導計画を立ててはならない。

最初の1時間目、児童にはALTを知ってもらうこと、ALTには児童のことを知ってもらうことから始めた。ALTにとっては日本の教育施設において指導することは初めての経験であったが、日本文化や教育を理解しようとする関心の高さも手伝って順調に授業を進めることができた。児童もALTが話す英語を理解しようと絵や身振り、英語科担当教員の助けを得ながら学習していた。

児童の英語レベル等を考慮し、まずはアルファベットの読みから始めることとし、会話力の基礎となる単語や表現を英会話教材“Let's go 1” (Oxford Press) を用いて指導していくこととした。

この教材は台湾国内の英会話教室でも広く使われている教材で、学校の身の回りにあるものの名前、それを使った表現の口頭練習ができるようになっている。付属のワークブックを使って文字による家庭学習の課題を出すことができた。

(3) 小学部6年生の指導

小学部6年生にとっては2年目の英会話の時間となる。5年時には英語の音声に慣れ親しむと同時に、文化や風習に触れる機会を持つことに重点を置いて指導を行った。それを踏まえて、6年時の指導ではより幅広い表現活動ができるように、使える語彙や表現を広げることに重点を置いて指導を進めていくことにした。もちろん、英語を身につけることを重視するあまり、英語に対しての関心・意欲を失うことがあってはならないので、バランスを取るように留意した。使用した教材は、5年生で使っている教材の続編で、“Let's go 3”とした。授業1時間で2ペー



テキストを使った指導を行うALT

ジを扱い、その日に学習したことをワークブックを使って家庭学習の課題としていた。

文化や風習への理解についても実際に体験することで、深めていくことができたと感じている。西洋文化を発祥とする風習（ハロウィンやクリスマス等）を我々日本人教師が指導することは可能だが、実際にその風土で生活をしている方から指導してもらうことは、児童にとっても非常に有意義である。そうした意味からもALTの起用については意味があったと考えている。

3. 成果と課題

(1) 成果

① 英語を使わなくてはならない場面を設定すること

英語のみならず外国語を身につけようとするときには、その言語を使用しなくてはならない場に身を置くことが有効であることは多くの人が経験上おわかりいただけることであろう。日本人教師が英語を用いて授業を進める場合、児童にしてみれば教師に対して英語で話しかけることの意味や有用性が薄いことは否めない。

年度当初に児童はALTと「授業では英語のみを使うこと」と約束することにした。授業を開始するまでは、5年生にとって初めて触れる英語で45分間活動を行うことには無理があるのではないかと思ったが、児童たちは何とか身振り・手振りを駆使しながら自分の思いを伝えようとしていた。指導が進むにつれ、使える語彙数や表現が増えるに従って、言葉を通してのコミュニケーションが増えていったことは大きな成長であるにとらえている。

② ワークブックを用いた家庭学習が学習事項の定着につながる

平成23年度より試行される学習指導要領における外国語活動では、英語の指導は音声面の指導にとどめ、文字の指導は中学校での指導項目とし、小学校では扱わないこととなっている。在外教育施設である日本人学校は、学習指導要領に沿った教育を行うと同時に、設置者が現地日本人会の私立学校の側面を持っているため、学校独自の教育課程を計画し、実施が可能である。ワークブックを使用した指導をすることは必然的に文字の指導をし、文字を伴った家庭学習の課題を与えることとなる。

ALTとの打合せでも文字の指導のことについては話題となった。ALTは「これまでの児童に対する英語指導の経験から、英会話の力をつけたいのであれば、学校での指導の後に復習を家庭でする必要がある。」との見解を持っており、協議の上文字の指導をすることとした。アルファベットの読み書きから、フォニックスを用いた文字と音声との結びつけ、単語の読み書き等を児童の進度に応じて進めていった。もちろん文字を用いた活動が児童にとって過度の負担とならないよう配慮するよう心がけた。

③ 何より授業の中に「楽しみ」を設けること

言語を身につけていくことはそうたやすいことではない。また、その言語とどう出会うかが、以後の学習に大きく影響している。授業中の集中力を持続させるためにも、楽しく活動ができるように計画をした。ゲーム的な要素・内容を多く取り入れ、個人で得点を競ったり、グループで対抗させたりしながら授業を進めたのも、その一例である。そうした活動を通して児童がたくさんの英語を聞き取り、話す機会を得て英語を使うことを繰り返すことによって、徐々に定着していくことを狙った。この試みを通じて概ね目的を達成できたと思っている。

(2) 課題

① レディネスの違いにどう対応するか

小学5年生から始まる外国語活動ではあるが、中には幼児教育の段階から英語教室に通っている児童もいる。これは国内の小学校でもあり得ることだが、台中校ではこの傾向が強い。台湾での教育熱の高さ、また日本人学校に通わせる家庭も教育に熱心なところが多いからか、英語教育には関心が高く、早期から英語学習を始めている児童も少なくない。学校としては、初めて英語に触れる児童にとって負担になりすぎないようにすることに配慮しながら

らも、そうした既習者が退屈しないレベルでの授業展開をしていかななくてはならない。しかし、中にはアメリカンスクール経験者、英語検定3級に挑戦しようとする児童等もあり、対応に頭を抱えることが多かった。

② 文字を用いた指導をすべきかどうか

小学校の外国語活動で文字を用いた指導を行わないとしているのは前述のとおりである。日本語の読み書きをしつかりと身につけることが優先される時期なので、加えて英語の読み書きを習得しようとする負担になる児童も出てくるであろう。実際に家庭学習の課題として出したワークブックの宿題も、家族の手助けを得ながら提出していた児童もいたことは確かである。(そのような児童には全体に出した課題よりも容易に達成できるものを与えるようにした。)「小学校の外国語活動が、中学校英語の前倒しにならないように」と言われるが、好奇心旺盛、いろんなことを身につけたいという意欲も大いにある時期に指導するのも良いのかも知れない。しかし、これから国内では本格的に始まる外国語活動がどのように展開されていくかも合わせて、今後の動向を見ていく必要があると思う。

③ ALTの採用選考をどのように行うか

これは日本人学校における特有の課題であると思う。特に今回はALT採用を立ち上げた形となったため、どのような手順で採用契約を結ぶか、派遣教員である私にとっては大きな問題であった。それを乗り越えられたのは過去の記録や様子を知っている事務主任の協力があったからである。地元の様子をよく知る方のネットワークの広さは、何よりも心強いことであった。

今後契約更新を行うことになるが、どのような基準で進めるのか等のルールを明確にしておくことが大切ではないかと考える。しかし、ここまでの引継ぎができなかったことは残念である。

4. おわりに

小学生との授業は中学校教員である私にとって初めての経験であった。台中校の児童生徒は、何事にも一生懸命取り組み、成果を上げることのできる子ども達である。英会話の学習においてもそのことは顕著に表れていた。週1回の英会話の授業を、目を輝かせて楽しみに待っている子どもたちの顔は、我々教員の活力となっている。

また、日本を離れ海外の地で教育を行うことができるのは、現地採用職員の方の協力があってこそだということを忘れてはならない。今回も採用契約の面では大変お世話になったことをこの場を借りて感謝したい。今後も台中校での英語教育が充実したものとなり、児童生徒たちが国際感覚を身につけた人間へと成長していってくれることを願って止まない。